学位（博士）論文　要旨

日本人学習者の中国語の声調誤用の分析と指導方法について
―日本の大学における第２外国語としての中国語教育を例にして―

丁　　雷

広島大学大学院総合科学研究科、東広島市　739-8521

Chinese Tone Error Analysis of Japanese Learners and the Instructions
A Case Study of Teaching Chinese as a Second Language in Japanese Universities

Ding, Lei

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University
Higashi-Hiroshima 739-8521, Japan

Abstract: Pronunciation error is considered to be one of the major obstacles to Japanese learners of Chinese. The amount of errors and difficulty of correction on tones contribute to the low quality of students' Chinese pronunciation. In the context of Chinese teaching in Japan, there lacks of researches on tone errors, nor effective instructions to the teaching of Chinese tones. The factors affecting Japanese learners' pronunciation of tones have been argued to be related to the lacking of tone changes within single syllables in learners first language (i.e., negative transfer) in literature.

However, how the negative transfer affects the tone pronunciation of Japanese learners remains unclear empirically. More specifically, it is not clear how the errors of both static tone and dynamic tone change under the circumstances of real Chinese teaching activities held in Japanese universities. These are the major problems worth of concerning in this paper. The other problem that will be discussed in this paper is about the instructions from teachers. Since the errors of tones are rooted in both learners and teachers, it needs serious reconsideration of the teaching of tones from two aspects: the neglecting of acquisition of tones in teaching and the problems in teaching instructions.

Keywords: Chinese teaching, pronunciation teaching, acquisition of tones, error analysis

序章　本研究の背景および目的

本論文の背景

日本人学習者の中国語学習にとって、最大の阻害要因は発音上の誤用である。特に、声調については、その誤りが多く、また矯正が難しく、声調誤用のために意図を正しく伝えることができないケースが多い。この経験から、筆者は、声調誤用の実態を解明し、それを改善指導する方策を考えることがこれからの中国語教育にとって重要であると考えるに至った。この認識に基づいて、本論文において、以下にあげる2つの目的を取りあげた。

本論文の目的

1）日本人学習者の発音誤用に多く見られる声調誤用の形成要因については、一般に、日本語には、中国語の声調のように、1つの音節内で発生する高低アクセントの曲線変化が無いから（つまり、学習者の母語である日本語からのマイナス転移があるから）であると考えられてきた（郭锦桴 1993, 朱川 1997, 楊立明 1999, 毛世桢・叶军 2002, 毛世桢 2008等）。しかし、学習者が発音する際、この日本語からのマイナス転移が声調誤用に具体的にどのような影響を与えるのかに関する実証的な研究はまだ少ない。特に、日本の大学における第2外国語としての中国語教育（以下、2外中国語教育と略す）の学習者を研究対象として、実験環境および実際の授業環境において、その「静態的な声調」や「動態的な声調」を、誤用分析の観点から調査した研究は極めて少ない。そうした研究成果の欠乏を補充するべく、その実態を調査することが本研究の第1の目的である。

2）学習者の発音における声調誤用が矯正されず残り続ける現状については、2外中国語教育における音声教育自体や教える側の発音指導法にも問題がある可能性がある。この点についての考察を行うとともに、それに基づいて、新しい指導法を提出することが本研究の第2の目的である。

第一章　文献調査

以上の2つの目的を実現するため、本論文の第一章においては、まず文献調査を通して、2外中国語教育の現状の問題点について大まかに把握するとともに、日本人中国語学習者の声調誤用に関する内外の先行研究を検討し、その問題点をまとめた。

第二章　音声テスト

第二章において、中国語を学習する日本人大学生を研究対象にして、「静態的声調」（単音節・/ma/の四声4種）と「動態的声調」（双音節・/mama /の四声の組み合わせ20種）についての音声テスト（「実験環境」）を実施し、被験者の発音の録音データを基に、その発音の正確率や誤用の分布特徴（ピッチ曲線、調形、調値、強度、発音時間、上昇幅、下降幅）を調査した。その際の手法としては、複数の中国語母語話者による正確さの判定と音声学の各領域でよく使用される音声分析用フリーソフトウェアPraatによる音声学的分析という2つの分析手法を組み合わせた。また、この分析結果を基に、声調誤用の実態をできる限り明らかにし、先行研究にある声調習得に関する見解の検証を試みた。なお、本音声テストによって明らかになった誤用実態の1例として、テストで得られた誤用率に基づく双音節の発音の難易度分類を挙げると、以下のようになる。

A段階（誤用率が2％以下の双音節）：発音が難しくない双音節

1＋1（1.2％）、1＋0（1.9％）

B段階（誤用率が2％以上4％までの双音節）：発音があまり難しくない双音節

4＋4（2.0％）、4＋2（2.3％）、1＋2（2.4％）、4＋0（2.7％）、1＋4（3.3％）、4＋1（3.6％）

C段階（誤用率が4％以上6％までの双音節）：発音がやや難しい双音節

2＋2（4.6％）、2＋4（5.1％）、4＋3（5.2％）、3＋1（5.4％）、2＋1（5.5％）、

D段階（誤用率が6％以上の双音節）：発音が非

常に難しい双音節

2＋3（6.3％）、2＋0（6.5％）、3＋4（6.8％）、1＋3（7.0％）、3＋0（8.0％）、3＋2（8.0％）、3＋3（11.4％）

第三章　授業調査

第三章においては、録音や筆記による記録という手法で収集された授業環境における「動態的声調」の誤用について報告し、実際の授業における声調誤用のデータを基に、音声テストで得られた分析結果を補足した。なお、本授業調査によって明らかになった誤用実態の1例として、調査で得られた誤用率に基づく双音節の発音の難易度分類を挙げると、以下のようになる。

A段階（誤用率が2％以下の双音節）：発音が難しくない双音節

1＋1（1.7％）

B段階（誤用率が2％以上4％までの双音節）：発音があまり難しくない双音節

1＋0（2.5％）、1＋4（2.7％）、4＋1（3.0％）、4＋0（3.4％）、2＋2（3.7％）

C段階（誤用率が4％以上6％までの双音節）：発音がやや難しい双音節

1＋2（4.0％）、1＋3（4.6％）、4＋4（4.7％）、2＋3（5.0％）、4＋2（5.3％）、2＋1（5.3％）、

4＋3（5.4％）、3＋0（5.5％）、3＋1（5.6％）

D段階（誤用率が6％以上の双音節）：発音が非常に難しい双音節

2＋4（6.8％）、2＋0（7.0％）、3＋2（7.3）、3＋4（7.6％）、3＋3（8.0％）

他方、授業調査のもう1つの目的に関連して、2年間にわたる実際の授業の観察を通じ、「教育時間の不足」という根本的な問題から、「総合課」という授業形式が生み出され、その実態が、「文法学習のための会話練習」になっていることを指摘した。また、そこから、1）「漢字中心」（「詞本位」主導）教育法の採用、2）新出の字音と既習の字音間の関連付けの不足、3）中国語発音のインプット量やアウトプット量の絶対的な不足という、2外中国語教育が抱える3つの問題点が生まれていることを指摘した。

第四章　新しい発音指導法の提出

第四章では、先行する章での考察を基に、2外中国語教育における大学1年生を対象とした「発音会話中心」授業の枠組みにおける新たな発音指導法とそれに基づく授業案を提案した。これは、郭春貴(2011)が提案した2本立ての教育モデル（発音会話中心モデル＋文法語彙中心モデル）の1つの柱である「発音会話中心」授業の枠組みにおいて、その内容を肉付けする形で構想された指導法であり、大きく、「ピンイン主導原則」、「核心字音訓練法」、「リズム訓練」の3つからなる。その教育方式は、単字音訓練から多音節訓練へ、多音節訓練から音感能力養成へという道筋を取る。また、その音声教育の中心は、声調に置かれる。中心となる3つの指導法をまとめると、以下のようになる。

①ピンイン主導原則：「ピンイン主導原則」とは中国語漢字の「形」、「意味」よりも漢字の「音」を重視し、教える過程でなるべく漢字を用いず、ピンインのみを用い、授業での書き取りや発音練習の際にも、意識的にピンインを多く使うように試みる指導原則である。

②核心字音訓練法：「核心字音訓練法」とは、使用頻度が極めて高い漢字と音節をコーパスで抽出し、それらを「核心字」の位置に置きその組み合わせからなる多音節を使って、そこにおける声調誤用を重点的かつ集中的に矯正するための音声訓練法である。

③リズム訓練法：「リズム訓練法」とは、「节奏段子」の概念に基づくもので、1）双音節の音読に「节奏段子」を利用し、2）多音節の声調練習に/ma+ma/、/ma+ma+ma/、/ma+ma+ma+ma/等の音節を用いた声調の組み合わせによるリズム練習を導入し、3）日本の既存の中国語教材テキストの中にポーズのマーキングを行い、4）そのテキスト内容をリズム訓練用の「节奏段子」のバリエー

ションに書き直した、指導法である。

第五章　まとめ

最後に第五章では、本論文の研究概要、研究成果および残された課題をまとめた。本論文における音声テストと授業調査で得られたすべてのデータは付録の形で本論文の巻末に付けた。また特に音声テストで得られた全音声データ（WAVファイル）についても、付録の音声CDという形で巻末に付けた。

参考文献

曹文(2010)：《现代汉语语音答问》，北京大学出版社

郭锦桴(1993)：《汉语声调语调阐要与探索》，北京语言学院出版社

林焘(1979)：〈语音教学和字音教学〉，《语言教学与研究 1979年第2期》，北京语言大学出版社

林焘(1996)：〈语音研究和对外汉语教学〉，《世界汉语教学 1996年第3期》，北京语言大学出版社，p.18-21

林焘・王理嘉(2009)：《语音学教程》，北京大学出版社

毛世桢(2008)：《对外汉语语音教学》，华东师范大学出版社

毛世桢・叶军(2002)：《对外汉语教学语音测试研究》，中国社会科学出版社

王韫佳(1995a)：〈也谈美国人学习汉语声调〉，《语言教学与研究 1995年第3期》，北京语言大学出版社，p.126-141

吴宗济・林茂灿(1987)：《实验语音学概要》，高等教育出版社

朱川(1997)：《外国学生汉语语音学习对策》，语文出版社

窪園晴夫(1994)：『語形成と音韻構造』，くろしお出版

窪園晴夫・太田聡(1998)：『音韻構造とアクセント』，研究社出版

窪園晴夫(1999)：『日本語の音声』，岩波書店

窪園晴夫・本間猛(2002)：『音節とモーラ』，研究社出版

鈴木誠(2001)：「中国語学科入学時発音指導について」，『中国研究　2001年第9号』，麗澤大学，p.73-79

斉藤遥(2010)：「学習者音声の中国語声調第2声の母語話者主観評価に影響する音響的特徴」，『早稲田大学院文学研究科紀要　2010年第2号』，早稲田大学，p.229-241

塚本尋(2001)：「北京語における連続音中の諸現象　中国語発音指導法試論3」，『杏林大学外国語学部紀要　2001年第13号』，杏林大学，p.133-151

塚本尋(2008)：「日本語母語話者への中国語声調指導　中国語発音指導法試論4」，『杏林大学外国語学部紀要　2008年第20号』，杏林大学，p.207-215

Ashby, Michael / Maidment, John(2005): *Introducing Phonetic Science*, CAMBRIDGE PRESS

Ellis, Rod(1997): *Second Language Acquisition,* OXFORD UNIVERSITY PRESS

Krashen,S(1985): *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. Torrance, CA: Laredo Publishing Company, Inc.

McNamara, Tim(2000): *Language Testing*, OXFORD UNIVERSITY PRESS

Prigogine, Ilya(1978): Dissipative Structure, *SCIENCE V201,* p.777-785

Robert, Lado(1957): *Linguistics across cultures: applied linguistics for language teachers*, University of Michigan

Roach, Peter(2001): *Phonetics*, OXFORD UNIVERSITY PRESS

Saville, Troike, Muriel(2006): *Introducing Second Language Acquisition*, CAMBRIDGE PRESS

Swain,M.(1995): *Three functions of output in second language learning*. In G. Cook & Seidlhofer, B.(Eds.), Principle and Practice in Applied Linguistics (pp.125-144). Cambridge: Cambridge University Press.